

ル・アーヴル：オーギュスト・ペレにより再建された街 ～モネの『印象・日の出』が描かれた街、北フランス・ノルマンディー地方を訪ねて～

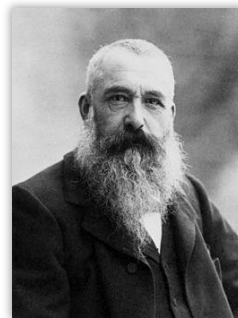


ル・アーヴルへは、パリから列車で約2時間、日帰りで行くことができます。ル・アーヴル駅から街の中心部までは、トラムで数分と便利です。都会の喧騒はなく、整然とした街並みで、こざっぱりといった感じでしょうか。それもそのはず、ル・アーヴルは第二次世界大戦の激戦区で、ノルマンディー上陸作戦で街の殆どが破壊されたのですから……。

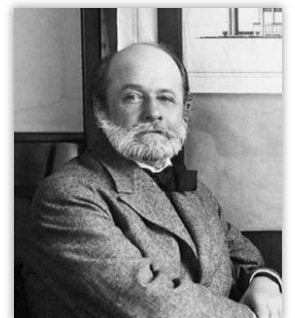
街が再建され、現在の姿となったのは戦後約20年経ってからで、その再建を託されたのが、建築家のオーギュスト・ペレ（1874年～1954年）です。ペレが再建で手掛けた建物の多くは、コンクリート建築です。コンクリート建築は日本でもよくみられますが、ヨーロッパは石造りのイメージが強いので、なんとなく整然とした印象を受ける方が多いのではないのでしょうか。

さて、街中を歩き進めると浜辺に出ます。浜辺から先の光景には戦争の傷跡は見受けられません。陽光さんと輝くル・アーヴルの海です。ここで主役が代わります。少年時代、この街で過ごした、画家のクロード・モネ（1840年～1926年）です。モネはル・アーヴルとその近郊の風景を好んで描いています。

ル・アーヴルのふたりの主役、オーギュスト・ペレとクロード・モネには、意外な共通点があります。ふたりとも、フランス最高峰の美術アカデミーと謳われる、パリの国立高等美術学校「ボザール」出身なのです。ペレは建築、モネは絵画とジャンルは異なりますが、モネはペレにとって大先輩にあたります。また、ペレはこの学校で教鞭も取っていて、パリのシャンゼリゼ劇場もペレの設計です。

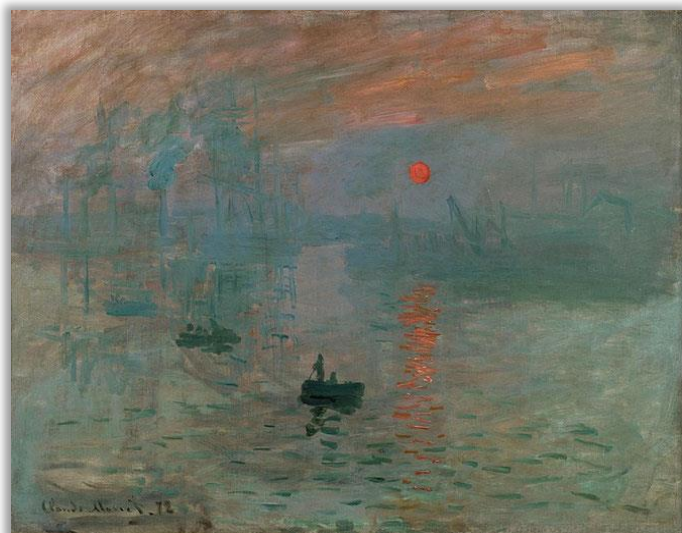


クロード・モネ



オーギュスト・ペレ

話をル・アーヴルに戻しますと、現在、モネが過ごした頃の街並みは遺っていませんが、「印象派誕生の街」と呼ばれています。なぜなら、モネの代表作『印象・日の出』（1872年）が描かれた街だからです。この作品をご覧になって、どのような印象をお持ちになるのでしょうか。賛否両論あると思います。1874年にパリで開催された「第1回印象派展」では、賛否どころか、非難の的となった作品です。私の第一印象は、曖昧過ぎてよく分からず、モネの才能を思うと、もう少ししっかりとした筆さばきを期待したいところ。どちらかというと、非に近いものでした。



「印象・日の出」
1872年／マルモッタン・モネ美術館蔵



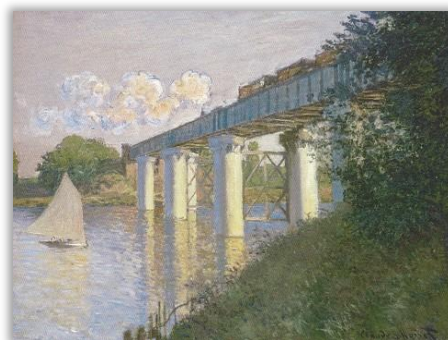
「テムズ川と国会議事堂」
1871年／ロンドン・ナショナル・ギャラリー蔵

なぜモネはこのような作風の絵を描いたのでしょうか、紐解いてみたいと思います。

『印象・日の出』が制作されたのは、モネが普仏戦争後にロンドンから帰国した翌年、1872年です。確かに、それまでのモネの作風と比べると、“ぼんやりとした作風”になっていて、ロンドンに滞在したことがいかに彼に影響を及ぼしたかが伝わってきます。しかし、帰国後すぐにこのような“うつろう作風”に変わったかという、そうでもないのです。そこで、モネのロンドン滞在前と帰国後の代表作を見比べてみましょう。『かささぎ』（1868年）、『アルジャントイユの鉄道橋』（1874年）、『ラ・ジャポネーズ』（1875年）。これら3作品は、『印象・日の出』の前後に描かれた作品です。ご覧の通り、『印象・日の出』だけ作風が異なっていることがお分かりいただけたと思います。つまり、「第1回印象派展」での『印象・日の出』の発表は、今までにないこの斬新な作風が、パリ画壇やパリの人々にどのように映るか、試してみたかったのでしょう。試験的な作品といって良いと思います。



「かささぎ」
1868年／オルセー美術館蔵



「アルジャントイユの鉄道橋」
1874年／フィラデルフィア美術館蔵



「ラ・ジャポネーズ」
1875年／ボストン美術館蔵

『印象・日の出』は、ロンドンから帰国した翌年に描がかれていることから、ロンドン滞在中に特別なインスピレーションを吸収した可能性があります。前回の「マイスターのささやき」でご紹介した『テムズ川と国会議事堂』（1871年）と比較すると、作風の変化は一目瞭然です。しかも、たった1年の間での変化です。『印象・日の出』が明らかに異なる点は、“曖昧さ”でしょう。空や雲、光、水面を描くことにもともと関心があったモ

ネですが、“曖昧さ”の表現が加わったことで表現が広がり、その後の画家人生が大きく飛躍しました。年齢を重ねるにつれて、徐々に光の効果に曖昧さが加味された作風へと変化していき、光の表現が柔らかくなっていったのです。また、この作品は、英国画家ターナーの影響を受けたというのが、一般的な見方とされていますが、

それは後の時代の人たちが関連づけたのであって、本当にターナーの作品を観て、モネがそう描いたかどうかは、はっきりしていません。ターナーとモネの画風は、そもそも色調が全く異なりますし、ターナーはドラマチックな絵画が多いのに対して、モネは戸外制作を基本とした写生が多く、落ち着いた作風です。また、ターナーは空気感に注目し、モネは一貫して光の効果に注目していました。なので、この推測は少し違うような気がします。ですが、吸収した可能性のある技法もあります。それは、「塗り残しの効果」です。当時はフランスでもイギリスでも、油絵は「最後の一筆まで画面隅々まできっちりと描く」ことが当たり前で、かつ、主流でした。しかし、モネの『印象・日の出』には塗り残しがあり、完成作品には見えないのです。これは、ターナー作品との共通点です。描きかけで、曖昧で、塗り残しがあって、完成作品には見えない……。ターナーからインスピレーションを受けたとするのなら、その部分だと考えられます。しかし、「モネがターナーの影響を受けた」と断言するには、少し大げさです。単に、参考にした、取り入れた、技法を吸収したとする方が自然な気がします。というのも、画家にとって、それは、ありがちなことだからです。

また、画家というものは、他の画家の影響を受けたとされることを、画家本人が認めていれば別ですが、嬉しく思わないものです。ターナーへのオマージュを示す文献や作品が見当たらないのも、疑問が残ります。

ちなみに、モネが最も影響を受けたとされる画家は、ふたりいます。

一人は、当時、外光派の画家であった

ウージェーヌ・ブーダン（1824年～1898年）です。

ル・アーヴル滞在の少年時代から「空や雲、光」に

関心があったモネは、ブーダンに見出され、戸外

制作や油絵を指南されました。もう一人は、

オランダの風景画家ヨハン・ヨンキント

（1819年～1891年）です。「月明かりに佇む帆船」

を題材に取り上げることが多く、フランス滞在時に

、モネに風景画を指導しています。ところで、

ヨンキントをご存知でしょうか。1983年に東京で

『ヨンキント展』が開催されました。当時、学生

だった私は、聞き慣れない名前にどんな画家なの

だろうと、『ヨンキント展』に行き、画集を買った

ことを覚えています。日本で大々的に紹介された

のは、おそらくこの時が初めてだったと思います。

ヨンキントは、モネとは少し画風が異なりますが、

若かりし日のモネにとって、これから進むべき道

を示してくれた師のひとり、でした。モネは少年時代、

風刺画や似顔絵を主に描いており、風景画とは全く

趣の異なる作風でした。才能溢れる作品ではあっても、いわゆる画家と呼ぶに相応しい作品とは言えませんでした。モネが風景画を描くようになったきっかけが、このふたりの画家、ブーダンとヨンキントとの出会いなので



ウージェーヌ・ブーダン



「トゥルーヴィルの海岸」
1869年／オルセー美術館蔵



「ドルドレヒトの川景色」
1869年／個人蔵



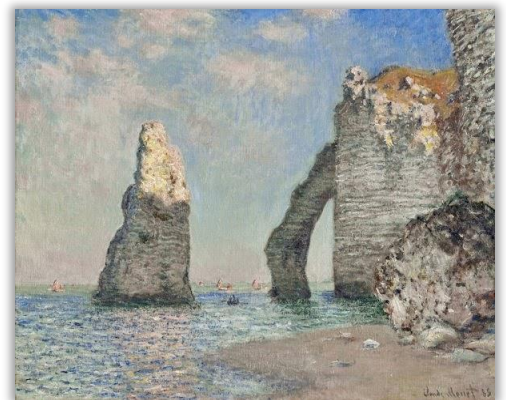
ヨハン・ヨンキント

す。モネの筆致は大胆です。小筆で繊細に描くことをあまりせず、一筆で表現できる技術を持っていました。これは、ブーダンとヨンキントにも当てはまります。

モネの初期作品は、光のはっきりした陰影とその筆致で、絵に力強さを感じます。ロンドン滞在以前からの作家の個性です。

モネは、初めからパリ画壇に反発していたわけではなく、官展「サロン」に何度も挑戦し、入選、落選を繰り返すうちに、自分を認めてくれないサロンに失望したのです。そういう中で誕生したのが、『印象・日の出』であり、『第1回印象派展』なのです。1874年のこの『第1回』を皮切りに、1886年まで合計8回、開催されました。8回とも全て参加したのはピサロだけで、モネは5回、ルノワールは4回です。意外かもしれませんが、マネは一度も参加していません。1880年代に入ると、ドガが印象派展の主流となり、モネは印象派の画家たちから徐々に離れていきました。そして、サロンに戻っていくのです。

ル・アーヴルは日本人には馴染みの薄い街ですが、観光地として知られる街「オンフルール」と、セーヌ川河口を挟んでいます。対岸に位置するふたつの街は、全長2kmを超える「ノルマンディー橋」で結ばれています。オンフルールはブーダンが生まれた街で、街外れにひっそりと「ブーダン美術館」が在ります。一方、ル・アーヴルは 野獣派の画家ラウル・デュフィの生誕地でもあります。世界遺産として登録されたエリアには、街のシンボルとなっている、ペレが設計した高さ110mの「サン・ジョセフ教会」、ブーダンやデュフィの作品などが数多く展示されている「アンドレ・マルロー美術館」などが在ります。ル・アーヴルとオンフルールは至近距離なので、セットで訪れたいものです。パリ発のこの2都市を巡るオプションツアーがあれば良いのですが、おそらくないと思います。また、ル・アーヴルから車で30分ほど北に向かうと、モネが題材とした「エトルタの断崖」が広がります。ル・アーヴルは、ペレも含めて、数ある芸術家たちゆかりの地です。パリのような都会の喧騒もない、物静かな印象の街、ツアーでは訪れにくい世界遺産、日本人の少ないノルマンディーのビーチ、知る人ぞ知るとっておきの美術館……。ル・アーヴルには、名立たる観光名所とはまた違った、フランスの魅力があります。



「エトルタの断崖」
1885年/クラーク美術館蔵

沼田政弘

～ちょこっとコラム～

ノルマンディー地方は、ブドウの栽培に適していないため、ワインの代わりに、リンゴで造るシードル（醸造酒）やカルバドス（蒸留酒）の産地として有名です。ノルマンディー地方に行かれる機会がありましたら、シードルやカルバドスも、ぜひご賞味ください。